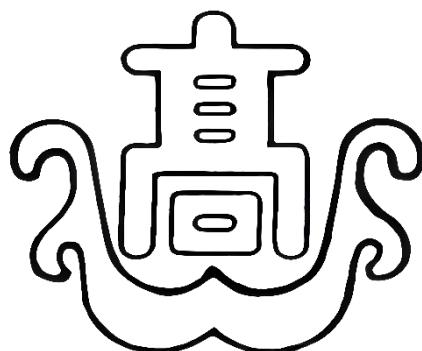


令和5年度・令和6年度沖縄県教育委員会
研究指定「環境教育」

研究集録（最終年度）

研究主題

「学校全体で取り組むSDGs」



沖縄県立辺土名高等学校

令和7（2025）年1月28日（火）

〒905-1304 沖縄県国頭郡大宜味村饒波 2015 番地

TEL : (0980)44-3103 FAX : (0980)44-3951 <http://www.hentona-h.open.ed.jp/>

研究の概要

教諭 徳元 将太郎

I 研究主題

「学校全体で取り組む SDGs」

II 研究主題の設定の理由

2021年、「やんばる」は顕著な普遍的価値が認められ、奄美大島、徳之島、西表島と併せて世界自然遺産に登録された。本校は、やんばるの豊かな自然に囲まれた立地条件を活かし、主に自然環境科の授業においてフィールドでの体験的な環境教育を実践してきた。また、サイエンス部による生き物博物館の案内、飼育動物との触れ合い、ボランティア活動やガイド等地域向けイベントを通して環境教育の推進に努めてきた。しかし、これからは環境教育だけではなく、世界中の様々な課題に目を向け誰一人取り残さない社会の実現を目指して、持続可能な開発目標「SDGs」の達成に注力しなければならない。本研究では、自然環境科やサイエンス部内だけでなく、普通科目の授業や特別活動、生徒会活動、学校行事において SDGs を意識した取組や実践を行い、学校全体での取り組みによって生徒と職員の環境教育及び SDGs に対する意識変容を検証する。

III 研究の目標

本校環境教育のテーマとして「Think Globally, Act Yambally～地球規模で考え、やんばるから行動する～」という言葉を活用してきた。これは環境教育において一般的に知られる「Think Globally, Act Locally」という標語の「Locally」を「Yambally」という造語に替えた本校独自のスローガンである。この考えを地道に実践し、グローバルな視野で考え、主体的に行動する生徒を育成して SDGs 達成の一助となるように取り組んでいきたい。

IV 研究の仮説

これまで自然環境科に特化していた環境教育を、学校全体での SDGs を意識した実践に引き上げることによって、全校生徒及び職員の環境教育や SDGs に対する意識を高めることができる。

V これまでの本校における環境教育の主な取り組み

- 2000年 第1,2回クリーン作戦（その後毎年継続）、蝶園づくり
- 2001年 環境科設立
- 2004年 全国高校生自然環境サミット(佐賀県唐津)に初参加（その後は毎年参加）
- 2013年 全国高校生自然環境サミット本校開催。全国から11校が参加
- 2015年 平成27・28年度県教育委員会研究指定「環境教育」
研究主題「自然環境を大切に考える考え方と態度の育成」
- 2019年 平成31年度県教育委員会研究指定「持続可能な開発のための教育（ESD）」
研究主題「ESDの取組における本校の可能性について」
- 2019年 全国高校生自然環境サミット本校開催。全国から9校が参加
- 2021年 令和3・4年度県教育委員会研究指定「環境教育」
研究主題「SDGsの視点で検証する本校環境教育の取り組み」

- 2022年 環境科から自然環境科へ学科名変更
 2023年 令和5・6年度県教育委員会研究指定「環境教育」
 研究主題「学校全体で取り組むSDGs」
 全国高校生自然環境サミット本校開催。全国から7校が参加
 2024年 全国高校生自然環境サミット（北海道 標茶）。全国から7校が参加
 アースバトン in 霧島～九州・山口のみらい～に沖縄県代表として参加

VI 研究の実際

1 各教科・科目におけるSDGsを意識した授業

(1) 国語科

辺土名高校の情景を短歌に詠む

担当者 国語科 城間秀之

はじめに

辺土名高校の周囲は豊かな自然に囲まれている。しかし、日々生活するうちに慣れてしまい、無意識で当たり前の日常に埋没する。そこで身近な情景を和歌に詠むことで、感性を研ぎ澄まして身近な環境を捉え直し、それを言語化することで、より意識的に自然や環境と向き合うようになることをねらった(14 海の豊かさを守ろう、15 陸の豊かさを守ろう)。ICTを活用することで互いに詠んだ短歌を共有し相互評価することで、同じ環境を自分とは違う視点からとらえている級友の存在にも気づかせたい(4 質の高い教育をみんなに)。

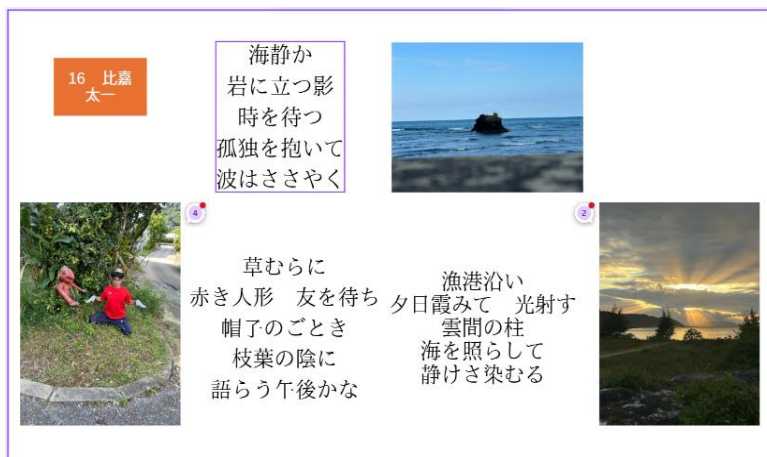
具体的な取組

- ① 短歌の詠み方や表現技法を学ぶ
- ② 校内を散策し、情景を写真に撮る
- ③ Canva に写真を貼り、その情景を詠んだ短歌を入力する
- ④ Canva 上で詠んだ短歌を相互に鑑賞し、コメントを付け合う
- ⑤ 振り返り

成果と課題

授業を通して生徒は、何気ない日常や自然の情景を和歌に詠むことができていた。自然の情景を詠んだ生徒は、日常の中にある豊かな自然を意識的に捉え直すことができたようである。自己の置かれた環境を意識的に対象化して見ることで、環境の維持や保全へとつながっていくことを期待したい。一方で操作を誤ってほかの生徒の作品を消去してしまうなどのトラブルもあった。ICTの操作に対するリテラシーの向上を今後の課題としたい。

写真1
生徒の作成した短歌の作例



(2) 英語科

外国語科（英語コミュニケーションⅡ）授業実践

辺土名高等学校 教諭 大城えりな

はじめに

インドネシアのバリ島に住む姉妹が自分達の島が大量のプラスチックごみを排出していることを知り、Bye Bye Plastic Bags 計画に取り組むという内容。この単元はSDGsの11(住み続けられるまちづくりを), 12(つくる責任つかう責任), 14(海の豊かさを守ろう)が示されており、その点を意識して自分たちの身近な問題として捉え読み進めた。

方法

単元：Lesson7 “You Can Make a Difference”

(バリのレジ袋撤廃運動—若者にも世界を動かす力がある)

- ・ワークシート・ノートを用い単語・熟語、リスニング、音読・黙読、内容理解、文法事項学習
- ・環境問題を扱う単元なので、ゴミ(garbage)、汚染(pollution)、地球温暖化(global warming)、森林破壊(deforestation)、環境に優しい(eco-friendly)などの英語表現等にも触れ身近な環境問題を考えるきっかけを与える
- ・partごとに読み、バリのレジ袋撤廃運動(姉妹の思い・活動・成果)について知る
- ・環境のために今自分がやっていることをあげる
- ・今後どんなことができるか、やりたいか、などを英語で書く。

成果と課題

レジ袋(プラスチックゴミ)の削減という同年代の学生が取り組んでいるという題材は親しみやすく、海外の実情を知ること、また自分たちの身近な問題として比較しながら考えてくれたと思う。今後は、総合探究として行っている学校内外のクリーン活動や、世界遺産としてのやんばるの環境保全のために自分たちに何ができるかを考え、英語で発信できる取り組みができればと思う。



外国語科(論理・表現)授業実践

辺土名高等学校 教諭 大城えりな

はじめに

本校自然環境科の3年生が行っている課題研究の発表・紹介を教科横断的授業実践として行う。個人またはグループの自己紹介と課題研究について英語でプレゼンテーションを行い、JICA 研修生との交流を深める。

方法

課題研究の時間で簡潔にまとめた各自(各班)の日本語での発表内容を論理表現(英語)の時間に翻訳アプリ(DeepL や Google 翻訳など)を用いて英語に翻訳する。アプリだけの翻訳では不十分な箇所や適切な表現になっていないこともあるため、ALT を含む英語教師でチェックしたあと、発音等に注意しながら読み練習を行う。交流会当日は、タブレットの翻訳アプリも用いながら校内で飼育しているヤギや小動物、魚の説明を行った。その後、2チームに分かれて JICA 研修生の前で各自(各班)の発表を行った。

成果と課題

今回、理科との教科横断的授業が実施できたことが良かった。生徒達は、自然環境科で学んでいることを自分たちで外国人に伝えることの楽しさと難しさを感じたと思う。私たち英語教師も自然環境科という独特の学科で彼らが学んでいる内容を知ることにより、生徒の新たな一面を知り、自分たちの授業に生かせる部分も見い出せた。一方で、発表のための練習が不十分だったため、うまく伝わらない部分もあった。今後も英語の授業の中で人前で発表する機会を増やし、また相手にうまく伝えるためのプレゼンテーションの仕方を研究し教科指導を行っていきたい。



(2) 数学科

バリアフリーを通して考える、誰もが参加できる社会

担当者 数学科 村口太一

はじめに

高校数学で取り扱う三角比はビルの高さを求める問題など実生活に結びつけて考えることができる。今回は、バリアフリー法で定められたスロープの勾配を利用して、学校の様々な場所にスロープを設置するとどのくらいの長さが必要か考えさせることを通じて、障がいや男女の差などをよく考えて、安全な学習のための環境作りを考え誰もが参加できる社会づくりを意識させる。

具体的な取組

- ① SDGs の目標とそれに関するバリアフリー法の説明
- ② グループに分かれて校内にある様々な段差の測量と計算
- ③ グループでの結果発表
- ④ 全体での振り返り

成果と課題

本時の授業を通して、普段の学習内容の実生活における有用性や車椅子利用者の目線を意識させることができた。全体での振り返りでは、「エレベーターやスロープがすぐには設置できなければどうするか」という問いに対して、HR 教室を1階に固定するなどのアイデアも生徒から出ており、本授業が意識の向上に寄与したと思われる。

写真1 測量の様子



写真2 スロープの長さを計算する様子



写真3 求めた長さをメジャーで体験する様子



写真4 振り返りの様子



(4) 理科

生活を支えるエネルギーについて考える (物理基礎)

担当者 理科・物理 比嘉 修

はじめに

現代の豊かな生活を支えるためにはエネルギー供給が重要であることを、生徒はこれまで様々な授業で学んできている。また、物理基礎の授業ではそもそもエネルギーとは何かというところから学習し、力学的エネルギーや熱について学んできた。

本実践では、これまでの学習内容と実生活のつながりを考えるために SDGs をテーマとして取り上げ、人類が抱えるエネルギー問題について科学的な観点から学びを深める。これにより、日々の生活の改善やよりよい社会づくりについて主体的にかかわる態度の育成を目指した。

方法

- ① エネルギーの形態とその変換について教科書・動画を用いて学習する。
- ② 電気エネルギーに着目し、発送電に関する現状や課題について、具体的な数を踏まえながらクイズ形式で学習する。(エネルギー変換や送電時のロス等)
- ③ SDGs 目標 7「エネルギーをみんなに そしてクリーンに」と現状の課題について学習する。
- ④ 発電の種類ごとに担当者を決め、生徒の学習端末でコスト、メリット、デメリットについて調査し、調査内容を集約して目標達成の手立てを検討する。

[活用 web サイト]



① [NHK for](#)



② [経済産業省 SDGs エネルギー学習推進ベースキャンペーン](#)



③ [国際連合広報センター](#)



成果と課題

発電が環境に与える負荷などについて理解を深め、エネルギーの貴重さに気づきを得ることができた。エネルギー変換効率の低さにも驚き、人類が利用している以上に無駄に排出されているエネルギーがあることを知り、持続可能な社会を目指すための科学技術の重要性を理解することができた。

学習を生徒の実践的な行動につなげるためには、教科の枠を超えて様々な教育活動において SDGs に関わる継続的な学びを、今後とも実践していく必要があると考える。

太陽光発電 経済性、利便性、技術発展性、環境への負荷など	担当者[]
① コスト 12.9円 (1kWhあたり)	
② メリット 安い、太陽がある限り使え、地球にやさしい	
③ デメリット 発電量の変動、メンテナンス費用、初期費用が高額	
電力発電 経済性、利便性、技術発展性、環境への負荷など	担当者[]
① コスト 1kWhあたり9~12円	
② メリット クリーンエネルギー	
③ デメリット 騒音	
SDGsの目標7「エネルギーをみんなに そしてクリーンに」を達成するための手立てについて、あなたの考えをまとめてください。	
(そのうち一長一短あり、完璧な発電源はない事がある。なので電気を大切に使い、技術の研究、研究をしていくべきだと思ふ。)	

はじめに

生物基礎の学習では、ミクロな視点（細胞）からマクロな視点（生態系）まで幅広い分野を学習する。その中で、第3章「ヒトの体内環境の維持」において、各臓器のはたらき及び自律神経やホルモンのはたらきを通じた血糖濃度の調節のしくみを学ぶ。人の健康と病気について関心のある生徒も多く、自分自身の生活と病気の関連について考えるよい機会になる。そこで、SDGs ターゲット 3「すべての人に健康と福祉を」を意識させ、血糖値の調節のしくみと関連付けた人類の歴史、飢餓、現代人の健康と自分自身の健康について考えさせていきたい。

方法

- ①ホルモンのはたらきを学習する
- ②血糖濃度の調節に関わるホルモンをその調節のしくみを学習する
- ③飢餓状態にある人の腹部が大きく張り出すのはなぜか、なぜそうなるのか
- ④日本人の5人に1人が罹患する「糖尿病」について知る
- ⑤血糖値を上げるホルモンは多数あるにもかかわらず、血糖値を下げるホルモンが1つしかないのはなぜか考える
- ⑥現代人が直面する糖尿病の原因と糖尿病を防ぐには、どのような食生活と生活習慣を心がければ良いのか考える



成果と課題

ホルモンのはたらきを通して、人類の歴史と現代人の病気の関連、飢餓状態にある地域の実情を考え、SDGs ターゲット 2「飢餓をゼロに」及びSDGs ターゲット 3「すべての人に健康と福祉を」を意識させることができた。日本人の5人に1人が罹患する糖尿病は、人類の飢餓（低血糖）との戦いから豊食による高血糖によって生じた疾患であることを理解させることができた。

はじめに

SDGs は生物に関する目標が多く含まれており、生物基礎の授業で関連付けながら学習することで理解を深めるとともに、目標に近づくことが考えられる。今回の授業では、SDGs17の項目のうち、14「海の豊かさを守ろう」と15「陸の豊かさを守ろう」を目標として実施した。

方法

単元：『生物基礎』（第一 生基 318） 第5章 生態系とその保全

外来種は、一般的に自然環境に悪い影響を及ぼすと考えられている。しかし、現在の身の回りの環境には、社会によい効果を与えているものや、社会に溶け込んでしまっているものもある。そのような外来種を今後、どう扱っていくべきかを考え、生徒の意思決定を育成する授業実践である。

【授業内容】

- ①初めに外来種に対する3つの立場にグループを分ける。
- ②グループ内でタブレットを活用し、情報を集めまとめる。
- ③その後、それぞれ立場の異なる3人（A、B、C）でグループを再構成しまとめた情報について共有する。
- ④話し合いが終了した後に、再度外来種の取り扱いについて個人で選択する立場を検討する。

【立場】

- A. 外来種を入れることに賛成 B. 恩恵のある外来種は入れることに賛成
C. 全ての外来種を入れることに反対の立場

成果と課題

授業のはじめではCの立場をとる生徒が多かったが、授業後にはBに変更する生徒も複数名いるなど、授業前後で自身の考えを改める生徒が見られた。また、立場は変えなかったが、自身が毎日食べているものや、園芸植物などがほとんど外来種であったことを知り、利用することに責任を持つ必要があるとの感想が出た。SDGsの目標と関連付けて考察する場面も多く見られ、互いに意見を交わしあいながら、学びを深めている様子が見られたため、一定の成果が得られたと考えられる。



(5) 社会科

日本国憲法における基本的人権と課題

担当者 社会科 中村 敦

はじめに

本単元は、日本国憲法の制定やそれにより保障されてきた基本的人権、その後の社会で生じてきた諸課題について、広い視野に立ち、公正に判断する公民としての資質・能力を養う単元である。日本国憲法における基本的人権の位置付けを認識させ、その革新的部分である「平等」の意味と差別の実態、その問題点と改善点について SDG s と関連付けて考察し、現代の諸課題を主体的に解決しようとする態度を養っていききたい。

方法

- ・ 本時の題材「平等に生きる権利」(教科書 P 5 8 ~ 5 9)。
- ・ SDG s 1 7 の目標を記載したワークシートを活用する。
- ・ SDG s 1 7 の目標と本時の題材との関連を考えながら授業を展開する。
- ・ SDG s 1 7 の目標から、本時の題材と関連するであろう項目の動画を視聴し、「平等に生きる権利」について考えていく。

成果と課題

SDG s に関する取り組みは、総合探究などでも行ってきたが、「現代社会」と SDG s の視点を関連付けた授業はこれまでほとんど実践したことがなかった。令和 5 年度「環境指定校」である本校の取り組みの一環として、各教科において SDG s の視点を取り入れた授業の実践、全校生徒への SDG s パスポートの配布・活用、全教室への SDG s 1 7 の目標の掲示など、あらゆる場面で SDG s に対する意識付けを行っている。その成果として、SDG s に関する生徒からの質問や、授業の中の様々な場面で積極的に SDG s と関連付けて考察するなど、SDG s、環境教育に対する意識の高揚が図られたと感じる。SDG s に関する意識付けを今後も継続していくことが課題である。

はじめに

SDGs 番号 16「平和と公正をすべての人に」を目標とした学習。本校は毎年3学年で野外学習＝平和学習フィールドワークを実施している。戦争遺跡を実際に巡ることで「やんばるの戦争」を五感で感じることは平和を考えるうえで重要な要素であると考え実施している。

方法

地域ごとの戦（いくさ）がある。地域ごとに沖縄戦は違う。地元を見つめ直すことの大切さを、平和学習の視点にも取り入れた学習。原本発行元の承諾を得て、北部の沖縄戦に内容を再編集した本校専用のワークブックで学習する。その内容は、学習者の「問い」を引きだし、戦争とは？平和とは？という問いを「自分事」とさせること。また、講師の話を一方向的に聞くのではなく「講師との対話」を通して、戦争には準備が必要など「歴史の因果関係」への考察へと誘う内容とした。

成果と課題

「実際に遺跡を見たり触ったりすることで、想像力が違った」という感想が物語るように、五感をフル動員して「戦争」を考えてくれた。ガイドの解説は「臨場感」を醸しだし、よりよく生徒達の心に「平和という時間の尊さ」「平和は守るもの」だと言うことが認識された。

「環境教育は命の教育」であるということが、十分に結びつく成果が得られた。

本部の戦跡巡り 平和に思い

【本部】 辺土名高校の3年生が7日、本部半島の戦跡を巡る平和学習を実施した。沖縄戦当時の本部半島の様子や戦争による被害、平和の尊さについて学んだ。3年生24人と教職員4人など約30人が参加した。

辺土名高生が平和学習

今年、沖縄戦から78年を迎えた。同校は以前は、最後の激戦地となった南部戦跡などで平和学習をしてきた。昨年からは地元の大宜味村で、今年は近隣の本部町を中心とした平和学習を計画した。

当日は、本部町立博物館の山本英康学芸員が案内と説明を務めた。午前の部は、本部町立博物館の展示を通して沖縄戦の概説や当日の学習目標を確認し

沖縄戦 78年

た。その後、天皇、皇后の「御真影」（写真）などが保管されていた奉安殿、「10・10空襲」の歴史を伝える迅鯨の鎮魂碑、本部防空監視哨跡などを回った。

午後の部は三中学徒の碑、八重岳野戦病院跡、上本部飛行場跡などに足を運んだ。生徒たちは真剣な表情で説明を聞き、一



山本英康学芸員の説明を聞きながらメモする生徒たち。7日、本部町の真部山

生懸命にメモを取りながら沖縄戦について学んでいた。それぞれの箇所で質問も出るなど、熱心な様子もうかがえた。

参加した神奈川出身の田中啓達さん(17)（環境科）は「フィールド（野外）に出て学べる

ことが魅力的だと感じた。本部町内を回って見ると、戦争跡が民家の近くや山手にもあった。人々の生活の中にも戦争跡が入り込んでいて激戦だったと感じた」と振り返った。

（上間宏通信員）

2 専門教科における環境教育

(1) 1年

やんばるの自然(自然環境科必修3単位)

担当：理科教諭2・実習教諭1

やんばるの豊かな自然の体験学習を中心として興味・関心を高め、生物と環境の関係性などについて学ぶ。普通科は令和7年度から2学年で授業を開設。

(2) 2年

①環境測定Ⅰ(自然環境科必修3単位) 担当：理科教諭2・実習教諭1

河川の水質や水生生物の調査、学校周辺の昆虫相、森林調査など環境を測定し、数値的に環境を比較することを学ぶ。

②野外の活動(自然環境科必修2単位) 担当：保健体育教諭2・外部講師1

海でのマリンスポーツや山でのガイドウォーク、野外での活動の仕方や救急救命訓練についても学ぶ。前半のマリンはオクムプライベートビーチ&リゾートで主に授業を行う。

(3) 3年

①環境測定Ⅱ(自然環境科選択4単位) 担当：理科教諭2・実習教諭1

環境測定Ⅰの内容を発展させ、様々な環境調査を行う。データの入力や分析、まとめ、レポート作成の一連の流れを主体的に行うことを目標としている。

②課題研究(自然環境科必修3単位) 担当：理科教諭5・実習教諭1

生徒自らが環境や科学に関する課題を見つけ、そのテーマについての調査・研究を個人またはグループで行う。その結果をまとめて考察し、研究レポートやプレゼンテーションで発表する。

③環境科学概論(普通科選択2単位) 担当：理科教諭2

地域(沖縄・やんばる)から世界における環境問題の事例について、実際に体感し、科学的な因果関係に基づいて理解する。



1学年やんばるの自然 両生類調査



2学年環境測定Ⅰ やんばるに伝わる川遊び



3学年環境測定Ⅱ 鳥類剥製づくり



3学年課題研究

3 総合的な探究の時間における環境教育

学年別のテーマ

- 1 年生「持続可能な社会づくり」・・・野外実習
- 2 年生「共生社会の形成と進路選択」・・・共同学習
- 3 年生「未来を創造する力」・・・新聞×SDGs、SDGs 創作アート&フォトコンテスト

3 学年 「総合的な探究の時間」 授業実践

辺土名高等学校 教諭 宮城通就

はじめに

3 学年総合的な探究の時間は「生きる力や創造する力、発信する力の育成」を目的とした探究学習とした。「変化の激しい社会に対応して、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目標」のもとで、生きる力や創造する、発信する力を育てたい。

方法

NIE 的手法の探究学習。生きた教材・社会とつながる窓である新聞を通して、SDGs (17 の目標) という考えの基礎・基本を学ぶねらいがある。同時に、SDGs は身近な行動と密接に結びついている事も理解させたい意図がある。つけさせたい力は、要約力・対話力・課題発見能力・発信力。今後の探究活動を「自分事」にするためのベースとなる(きっかけとなる)ように工夫した自作のワークシートで授業を行う。

新しいものさしで考える ～新聞×SDGs～

★誰一人取り残さないために3つの視点

経済 () ②

社会 ()

環境 ()

記事の要約
5W1Hの記入

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

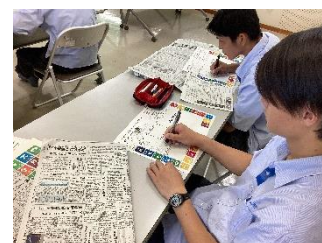
新聞記事を貼る

()月()日【新聞名】

手順(流れ)

- 1: 記事を選びましょう
- 2: 選んだ記事が、3つの視点(資料③)のそれぞれ何番に関連するか考えよう!
- 3: 記事の要約 5W1Hの記入
- 4: 最初の自分の考え
- 5: 友人の考え
- 6: 自分の考えの再考 (友人の意見をふまえる)
- 7: 学んだ語句や言葉
- 8: 新聞記事を貼る (何月何日何面社名)
- 9: 発表・提出します

学習の手順を説明し、2時間内で取り組む。ポイントは、①SDGsと日常を結びつける②他者の意見をふまえ自分の考えを再構築することである。自作ワークシートのサイズはA3版。



成果と課題

地域の強みを最大限に活かし、固定観念にとらわれずに柔軟な発想でSDGsを自分事へと消化(昇華)し、発信できる力を醸成しようとする内容である。同時にゴミとして捨てられたモノや見過ごされた風景に「思い」を吹き込むことで再生させるという「命の教育」でもある。創作活動を通して、対話や協働作業があり、生徒達の自己肯定感も芽生える成長が見られた。

生徒達の自分事としての「環境問題」へとアプローチができた活動であった。

4 学校行事における環境教育

- (1) 2023年5月1日(月) 遠足でのビーチクリーン
- (2) 2023年7月7日(金) 1学年 理科野外学習
2024年7月5日(金) 2学年 共同学習(桜野特別支援学校)
3学年 野外活動 平和フィールドワーク
- (3) 2023年11月10日(金) 第27回地域クリーンアップ作戦
2024年11月15日(金) 第28回地域クリーンアップ作戦・比地復旧作業
- ①1年生…学校周辺、饒波海岸周辺のゴミ拾い
②2年生…喜如嘉海岸周辺のゴミ拾い
令和6年大雨被害による国頭村比地区復旧作業
③3年生…大兼久海岸周辺のゴミ拾い



遠足後ビーチクリーンの様子



令和6年大雨被害による国頭村比地区復旧作業の様子



5 SDG s パスポートの活用

(1) はじめに

SDG s パスポートとは、平和で持続可能な社会を実現するために未来を担う児童生徒のボランティア活動を応援する沖縄県ユネスコ協会の取り組みの一つである。地域でのボランティア活動を通じて、人との“出会い”や自然と社会の“つながり”を広げ、地域の課題解決のために、自ら考え、行動する市民として成長することを目標として発行している。沖縄県ユネスコ協会発行のパスポートは、児童生徒だけではなく協賛企業の社員とご家族も活用することができる。



SDG s パスポートの使い方 画像引用元：沖縄県ユネスコ協会

(2) 成果と課題

- ・成果 生徒のボランティアへ参加するモチベーションを上げることができた。
- ・課題 ボランティア当日にSDG s パスポートを忘れてしまう生徒が多く、ポイントももらい損ねることが多くあった。また、SDG s パスポート自体の認知度が依然として低いため、ボランティアの主催者との事前の情報共有が必要である。

6 学級コンポストの活用

(1) はじめに

日本においては、古くから生ごみや糞尿を堆肥化し、農作物の肥料として利用する習慣が根付いていた。しかし、近代化及び都市化の進展に伴い、化学肥料や農薬の使用が増加した結果、従来の堆肥化の習慣は次第に減少してきた。近年では、サステナビリティや環境負荷低減への関心の高まりを背景に、「コンポスト」の名前で、堆肥化が再び注目を集めている。現在、辺土名高校では昼食の食べ残しが多く、毎日残飯として処分されている。各クラスに設置したコンポストを活用し、校内緑化やヤギ飼料の育成の肥料として利用することにより、環境に配慮した取り組みを実践した。

(2) 方法

- ①初めに堆肥化したヤギ糞（分解の促進剤）を入れる（厚さ1cm、底面を覆う程度）。
- ②昼食時に出た残飯を入れる。一度の量は200ml程度。
- ③コンポストを日当たりが良く、雨にあたらない場所に置く。
- ④2, 3日分が溜まったら再度ヤギ糞を入れる。
- ⑤①～④の繰り返し



各学級のベランダに設置したコンポスト



ヤギ糞を入れ発酵を促進

(3) 成果と課題

①成果

- ・美化委員を中心に活動し、SHRでSDGsの「11. 住み続けられるまちづくりを」「12. つくる責任つかう責任」の解説と、コンポストの活用方法や食べ残しを減らす必要性を説明させた。その結果、生徒同士協力しながら堆肥の追加を行ったり、学期末までコンポストを空にすることを目標に食べ残しを出さないように声かけする学級も見られるなど、主体的に行動する様子が見られた。
- ・コンポストにより残飯の有効活用ができた。

②課題

- ・堆肥化に時間がかかるため、残飯の量が多いとサイクルが間に合わなくなってしまう。美化委員を中心により一層の残飯を出さないための取り組みをしていきたい。

7 自然環境科・サイエンス部の活動内容の共有

(1) 初めに

自然環境科やサイエンス部では日ごろから環境教育を実践する機会が多く、充実した取り組みが行われている。しかし、普通科の生徒では一部のボランティアや取り組みは参加可能にしてはいるものの、それ以外については内容や実施期間の問題で参加が困難な状況である。そこで、自然環境科やサイエンス部の取り組み、成果物等を生き物博物館前に掲示することで取り組み内容の共有や取り組みへの勧誘を図り、普通科の生徒に対しても環境教育への意識を高めることを目指した。

(2) 方法

- ・ 自然環境科の授業内容のポスター化
- ・ サイエンス部の研究内容の掲示
- ・ 校外での取り組みに参加した生徒にポスターや記事を作ってもらい、生き物博物館に掲示

(3) 成果と課題

アンケート結果から研究や活動内容について触れることに好意的な意見が見られた。また、自然環境科やサイエンス部の生徒が活動内容のポスターを作成することで、学びの振り返りや、表現力を身に付けさせることができた。しかし、多くの生徒にとって流し見する程度で終わってしまっている様子であったため、今後は学級への配布資料にすることや、発表する場を設けるなどの工夫が必要である。

表1 アンケート「生き物博物館前の自然環境科・サイエンス部の活動報告や研究、展物等を見ていますか？」

よく見ている	たまに見ている	ほとんど見ていない	見たことはない
16%	38%	38%	8%

表2 アンケート「活動報告や研究、展示物等についての感想を教えてください。」

- ・ 普段見ることができない生き物について知ることができた。
- ・ 自然環境科の取り組みが生き物博物館の利用者に広めることができるのでよいと思います。
- ・ 普通科の授業でもやんばるに行く授業を増やしてほしいと思った。
- ・ 生き物博物館を通ることが無いから教室近くに展示してほしい。



サイエンス部の研究ポスター



自然環境科の活動



新聞の切り抜きや報告書等



生き物博物館の生物の説明



成果物の展示



アースバトン in 霧島の活動報告

8 自然環境科・サイエンス部における環境教育の主な取り組み <2023年>

○4月20日(木)、21日(金)

1年自然環境科宿泊学習

場所：国頭村森林公園

内容：野外炊飯、テント設営、ナイトハイキング、実習



○4月25日(火)

エリグロアジサシの繁殖地保全活動

内容：エリグロアジサシ繁殖場所(さざま石)に
接近注意喚起の看板設置、産卵場所の作成

講師：渡久地豊(屋我地鳥獣保護管理員)

参加者：サイエンス部 22名



○5月5日(金)

出張生き物博物館 in 道の駅おおぎみ

内容：飼育している生き物、標本等の展示、動物ふれあい

参加者：サイエンス部 8名



○5月20日(土)

沖縄生物学会第60回大会

主催：沖縄生物学会

内容：「名護岳と西銘岳の森林動物相の比較研究：名護岳も
頑張れ！」のタイトルでポスター発表を行った。

参加者：3名



○5月22日(月)

特設授業「ノグチゲラの生息するやんばるの森林生態系について」

内容：やんばる地域の森林生態系や、固有鳥類の生態、希
少げっ歯類の現状、外来種問題について、科研費

「鳥類標本の羽から探る生態と種分化」に関する研
究の成果を中心に講義・実習(プレイバック調査)
を通して学んだ。

講師：小高信彦(国立研究開発法人森林総合研究所九州支所)



○6月4日(日)

the11th OUTDOOR LEADERSHIP CONFERENCE

主催：一般財団法人 Wilderness Education Association Japan

内容：野外指導者の育成及び情報交換を目的としたカンファレンス オンライン発表

参加者：1名

○6月11日(日)

OIST ビーチクリーン

主催：OIST

内容：国頭村アダンビーチのビーチクリーン活動

参加者：サイエンス部 10名



○6月11日(日)

大宜味小学校総合学習

主催：大宜味小学校

内容：生き物博物館の案内、POLYHEDRA 管理のシークワ
サー畑にて生き物観察

参加者：サイエンス部 9名



○6月26日(水)

第1回CS特設授業 田嘉里川に伝わる川遊び

主催：辺土名高等学校

内容：田嘉里に伝わる川遊びを講師を招いて教わった。
田嘉里区の今と昔、イーブー釣り等

参加者：2学年自然環境科 24名



○7月1日(土)

令和5年度 わんぱく体験団

主催：大宜味村教育委員会

内容：「田嘉里川で生きものをつかまえて調べてみよう
Part11」

参加者：サイエンス部 12名



○7月17日(月)

令和5年度 ぶながやの里生涯学習講座

主催：大宜味村教育委員会

内容：「辺高生が案内するエリグロアジサシ観察会&講演会」

参加者：サイエンス部 5名



○7月29日(土)、30日(日)

第47回全国高等学校総合文化祭 2023 かがしま総文

主催：文化庁、公益社団法人全国高等学校文化連盟、鹿児島県、鹿児島県教育委員会ほか

内容：自然科学部門のポスター(パネル)発表を行った。タイトル：「名護岳と西銘岳の森
林動物相の比較研究(2) 2030年ネイチャーポジティブに向けて」

参加者：3名

○7月30日(日)

令和5年度 大保干潟活用プログラム開発事業

主催：大宜味村企画観光課

内容：辺土名高校生とめぐる大保の干潟で生きもの観察

参加者：サイエンス部 6名



○8月11日（金）

第7回「山の日」全国大会 2023 おきなわ

主催：一般財団法人全国山の日協議会

内容：記念行事の学生発表にて本校の取組を紹介した。

参加者：上原蓬



○10月8日（日）

高大連携 星槎大学との交流会（インクルーシブル教育）

主催：星槎大学

共催：琉球弧世界遺産フォーラム、辺土名高校

内容：やんばるの森と海と人に学ぶ自然との共生（地球環境共生演習2）、やんばる学習、チョウによる環境診断（バタフライウォッチング）、辺戸集落の散策
全盲の参加者の介添えを通してインクルーシブルな社会の形成について考えた。

参加者：サイエンス部6名



○10月14日（土）

国立自然史博物館誘致沖縄シンポジウム

主催：沖縄県

一般社団法人国立沖縄自然史博物館設立準備委員会

内容：日本初の国立自然史博物館を沖縄に設立する意義を話し合うシンポジウムにて、標本等の展示、研究ポスターの説明、本校の取組を紹介した。

参加者：島袋禮、仲宗根諒大、仲本茶真



○10月24日（火）、11月14日（火）、11月28日（火）

特設授業「英会話学習を通じた

自己理解・対話力強化プログラム」

内容：自己理解と意識改革、JICA 交流会に向けた英会話ドリル、英語での研究紹介プレゼンの準備

講師：大房千紘（国際交流事業をアップグレードする複業家）



○11月25日（土）

やんばるで外来植物 勉強会・駆除イベント

主催：沖縄県環境部自然保護課

内容：外来植物の観察・勉強会 ツルヒヨドリの駆除

講師：上開地広美（株式会社 ENDEMIC GARDEN H）

参加者：サイエンス部 10名



○11月28日（火）

JICA 研修員との交流プログラム

主催：JICA 沖縄

内容：11 カ国 13 名の研修員が「生物多様性」に係る研修の一環で本校に来校。生き物博物館の紹介、動物との触れあい、環境科3年生の課題研究を英語で紹介し交流を行った。



JICA 研修生出身国：バングラデシュ、コートジボアール、ベリーズ、エクアドル、フィジー、インドネシア、モーリシャス、メキシコ、ミクロネシア、フィリピン、東ティモール

○11月28日（火）

辺土名高校で沖縄・小笠原を知る特別授業

主催：環境省やんばる自然保護官事務所、やんばるリンクス

内容：やんばるにおいて世界自然遺産の「保全と利用」が課題となる中、地域での活動や辺土名高校の取組、石垣島・小笠原の事例を聞き、これからのやんばるを考えた。



講師：妹尾望（やんばるリンクス）、仲本光寿（環境省石垣自然保護官事務所）
成田智史（環境省やんばる自然保護官事務所）、仲宗根諒大（自然環境科2年）

○12月2日（土）

おおぎみ自然体験フェス

主催：やんばる観光クリエイティブながやー

内容：生き物の紹介・動物触れあい、標本の展示、
ドングリ笛の作成

参加者：サイエンス部 11名



○12月26日（火）～12月28日（木）

第24回全国高校生自然環境サミット in 辺土名

主催：全国高校生自然環境サミット実行委員会、
同生徒実行委員、沖縄県立辺土名高等学校

内容：世界自然遺産やんばるの豊かな自然環境とそれを支えている生き物に触れ、「自然との共生」を考えるきっかけとする。



参加校：北海道標茶高等学校、群馬県立尾瀬高等学校、明照学園樹徳高等学校、
獨協・中学高等学校、埼玉県立いずみ高等学校、佐賀県立唐津青翔高等学校、
沖縄県立辺土名高等学校

<2024年>

○1月13日（土）、14日（日）

やんばる自然体験ツアー

主催：沖縄県環境部自然保護課

内容：やんばるの自然についての学習、生き物博物館の案内、
飼育動物との触れあい体験、国頭森林公園ガイド

参加者：島袋禮、川口想来、仲井間憲汰、仲宗根諒大



○4月17日（水）

大宜味村の新村鳥の提案書提出

内容：辺土名高校サイエンス部の研究を踏まえ大宜味村長に
対しホントウアカヒゲを大宜味村鳥に制定する提案書
を作成し手渡しで提出した。

参加者：サイエンス部部长1名



○4月18日（木）、19日（金）

1年自然環境科宿泊学習

場所：国頭村森林公園

内容：野外炊飯、テント設営、ナイトハイキング、実習



○5月5日（日）

出張生き物博物館 in 道の駅おおぎみ

主催：大宜味村企画観光課

内容：サイエンス部の研究内容の掲示、飼育している生き物、標本等の展示、動物ふれあい

参加者：サイエンス部4名



○5月20日

**特設授業「ノグチゲラの生息するやんばるの森林生態系
について」**

内容：やんばる地域の森林生態系や、固有鳥類の生態、希
少げっ歯類の現状、外来種問題について、科研費
「鳥類標本の羽から探る生態と種分化」に関する研究
の成果を中心に講義・実習（プレイバック調査）
を通して学んだ。

講師：小高信彦（国立研究開発法人森林総合研究所九州支所）



○5月25日（土）、26日（日）

四学会合同沖縄大会 第61回沖縄生物学会

主催：沖縄生物学会

内容：サイエンス部研究「新たな固有種ホントウアカヒゲを
大宜味村の村鳥に加える取り組みについて」でポス
ター発表、「マングースのいない御嶽や御墓はオキナワ
トカゲのレフュージア：名護市内の事例からの予報」
一般口頭発表を行った。

参加者：4名

○6月9日（日）

大宜味小中学校特設授業

主催：大宜味村教育委員会

内容：大宜味小中学校にやんばるの自然や保全の取り組みについての特設授業を行うことで、環境や進学について考えるきっかけづくりを行った。

参加者：2名



○6月29日（土）

令和6年度 わんぱく体験団

主催：大宜味村教育委員会

内容：「田嘉里川で生きものをつかまえて調べてみよう Part12」

参加者：サイエンス部5名

○7月7日（日）

令和6年度 大保干潟活用プログラム開発事業

主催：大宜味村企画観光課

内容：大保の干潟で生きもの観察や講義、生き物マップを参加した小中学生とともに作成した。

参加者：サイエンス部5名



○7月9日（火）

群馬県立尾瀬高等学校オンライン特設授業

主催：辺土名高等学校

内容：群馬県立尾瀬高等学校の生徒に対して世界自然遺産・やんばるについての講義を実施

参加者：5名

○7月13日（土）

環境省エリグロアジサシ特設授業・観察会講師

主催：環境省

内容：環境省による講義、辺高生による観察会&ワークショップ

参加者：8名



○7月24～27日

第25回全国高校生自然環境サミット in 標茶

主催：全国高校生自然環境サミット実行委員会、標茶高校

内容：世界自然遺産やんばるの豊かな自然環境とそれを支えている生き物に触れ、「自然との共生」を考えるきっかけとする。

参加校：北海道標茶高等学校、群馬県立尾瀬高等学校、明照学園樹徳高等学校、獨協中学高等学校、埼玉県立いずみ高等学校、佐賀県立唐津青翔高等学校、沖縄県立辺土名高等学校



○7月27日（土）

科学の自由研究祭り

主催：浦添市教育委員会

内容：辺土名高校サイエンス部の取り組みの紹介、生き物や標本の展示、動物の触れ合いなど

参加者：6名



○8月5日（月）、10月1日（火）

令和6年度やんばる国立公園における滞在体験の魅力向上 先端モデル事業 地域ワークショップ

主催：環境省

内容：上記モデル事業の取り組みとして、様々な企業や地域住民の方々とワークショップを行い、やんばる国立公園と地域の未来について考える。

参加者：3名



○8月31日（土）、11月23日（土）

中城村津覇での生き物レクチャー

主催：一般社団法人 G.Y.U.T.（一般社団法人ギュット）

内容：中城村「つはっこ学童クラブ」や地域の児童生徒に見向け、辺土名高校生や教員による中城村の生き物ガイドや野外観察講座等

参加者：5名



○9月20日（金）～22日（日）

アースバトン in 霧島～九州・山口の未来～

主催：九州地域戦略会議（次世代育成 PT）

内容：九州各県の環境意識が高い高校生を対象とし、各県の高校生や環境分野で活動する方と交流を深めながら環境について学び、更なる環境に対する意識や興味を育むことにより、グリーン社会を担う次世代リーダーの育成を図る。

参加者：5名



○9月27日（金）

群馬県立尾瀬高等学校交流会

主催：辺土名高等学校

内容：辺土名高校内生き物博物館案内

大國林道・森林公園の生き物観察ガイド

参加者：2学年自然環境科 24名、3学年 2名



○10月13日（日）

第64回沖縄県生徒科学賞作品展

主催：沖縄県高等学校文化連盟自然科学部門

内容：「分断された小さな緑地はオキナワトカゲのユートピア：大きな緑地はかえってデメリット？」（優秀賞）、「マングースの個体減少に伴うホントウアカヒゲの分布回復の可能性」のタイトルでポスター発表を行った。

○10月19日（土）

お〜いお茶 Green Tea for Good Project

〜お茶で沖縄を美しく。〜

主催：沖縄伊藤園、沖縄アジェンダ 21

内容：辺土名高校生によるやんばるの自然講演会、外来植物ヒルギダマシの駆除活動、防除活動後の取り組み（防除植物のウッドチップ化&ヤギの飼料化等）

参加者：20名



○10月19日（土）

外来植物防除ボランティア

主催：沖縄地域環境コンサルタント

内容：慶佐次公園の外来植物防除や講義

参加者：2名



○11月10日（日）

令和6年度沖縄アジェンダ21 県民会議

県民環境フェア in 北中城

主催：沖縄アジェンダ 21

内容：県民一人ひとりが自らのライフスタイルを見直し、環境保全に向けて主体的に取り組む契機とするための取り組み。やんばるの自然についての講義と辺土名高校活動報告や沖縄伊藤園との取り組みの発表を行った。

参加者：6名



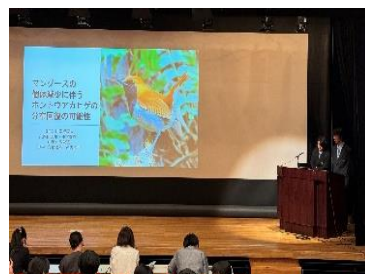
○11月8日（金）

高校生による生物科学展

主催：沖縄県生物教育研究会

内容：「分断された小さな緑地はオキナワトカゲのユートピア：大きな緑地はかえってデメリット？」「マングースの個体減少に伴うホントウアカヒゲの分布回復の可能性」のタイトルで口頭発表を行った。

参加者：4名



○11月26日（火）

JICA 研修員との交流プログラム

主催：JICA 沖縄

内容：6カ国8名の研修員が「生物多様性」に係る研修の一環で本校に来校。生き物博物館の紹介、動物との触れあい、自然環境科3年生の課題研究を英語で紹介し交流をした。

JICA 研修生出身国：バングラデシュ/エクアドル/インドネシア/ヨルダン/パラオ/東ティモール)



○11月30日（土）

国頭村外来植物防除ボランティア

主催：国頭村企画観光課

内容：大国林道内の外来植物防除や講座など
参加者：6名



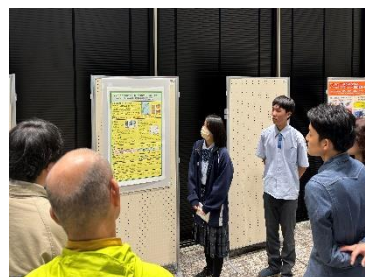
○12月1日（日）

沖縄島の自然環境と野生生物保全に関するシンポジウム

主催：国立大学法人熊本大学、後援：沖縄県

内容：熊本大学の主催するシンポジウムにて生徒による研究のポスター発表と、辺土名高校教諭による辺土名高校活動報告を行った。

参加者：8名



○12月16日（月）

赤土流出対策特設授業

主催：NPO 法人おきなわグリーンネットワーク

大宜味村赤土等流出防止対策協議会

内容：沖縄県の赤土汚染について学び、マルチング作業による流出対策の実践を行った。

参加者：30名



Ⅶ 先進校視察

環境教育研究指定校に係る先進校視察

理科 徳元 将太郎

1 目的

他県高等学校の自然環境科の取組及び地域と連携・協働した取組等の先進的な学校を訪問し、視察・聴取等を行い本校の学校活性化の参考とする。

2 先進校及び概要

視察校（１）群馬県立長野原高等学校

コミュニティー・スクール指定校及びハイスクール・ネットワーク指定校の取組状況聴取や、施設視察等

（２）群馬県立尾瀬高等学校

自然環境科授業及び施設や、地域協働活動の視察、取組状況の聴取等

3 長野原高等学校について

（１）ぐんまコミュニティー・ハイスクール事業（以下 CS）

地域密着型（住民に愛される生徒・学校）、地域連携行事への参画で情操豊かで活気のある生徒の育成

①地域から信頼される高校教育に関する研究

- ・生徒の進路希望実現のための教育内容、方法の開発、工夫
- ・地域への貢献と広報活動の充実

②地域の教育力を生かした高校教育の推進に関する研究

- ・地域教育機関等との連携
- ・地域と連携したキャリア教育の推進

③学校施設の地域開放と教育力の地域への発信に関する研究

- ・体育施設等の一般開放
- ・教育力の地域への発信に関する研究

○主な取り組み

- ・予算：なし ※活動は地域のボランティアによるもの。
- ・CS に関して学校運営上の影響について

メリットとしては、地域連携の取組について地域の方が理解しているため、事業の運営がスムーズで、学校の担当者が異動で替わっても引き継ぎに困らない。既存事業を変更する場合は調整が必要になってくるが、協議会についても年に２回（発足とまとめ）、業務時間内に行っているため負担感はあまりないとのこと。

（２）ぐんまハイスクール・ネットワーク構想事業

遠隔授業に関する文科省からモデル校指定。遠隔授業を通じた多様な学びの連携充実を目的とする。

○ぐんまハイスクール・ネットワーク構想事業について

①遠隔授業の取組について ※長野原高校が配信重点校

配信校 情報Ⅰ（情報）長野原高校→吾妻中央高校
ビジネス基礎（商業）需恋高校→長野原高校
ホームプラン（工業）長野原高校→需恋高校
理数物理（理数）渋川高校→尾瀬高校



長野原高校 遠隔授業の様子

- ②本来は配信先に該当教科の教員免許を持っている教員が着いていないと授業の配信はできないが、文科省からのモデル校として教育課程特例校のような扱いで認められている。
- ③モデル校指定3年間の令和5年度は最終年度であり、配信先との授業科目の調整等は県教委指導主事が入った会議で調整してきたが、次年度はどうか、未定の状況である。

4 尾瀬高等学校について

(1) 研究指定校について（県教委指定：連携型中高一貫校）

- ①趣旨：地域における体験的な活動や、小規模校ならではのきめ細やかな指導により、地域に根ざしながら幅広い分野で活躍できる力を身に付けることができる高校を目指す。（群馬県教委 HP スクール・ミッションより）
- ②連携校：平成15年度（尾瀬地域中高一貫教育実施）沼田市立利根中学校
片品村立片品中学校
- ③研究指定され、1学級32人定員としている。
- ④職員定数増の支援がある（在籍生徒数124名、教諭22名）。

(2) 施設及び自然環境科授業視察

①施設

自然環境棟：平成8年度、自然環境科の設置に伴い校舎周囲の森林にマッチしたログハウス風の環境棟を建築、1階に実験教室・準備室等、中央に研究発表会用のオープン教室、2階に1学級分の自習用の机とテーブルがあり、中央部には生徒作成の標本等や、寄贈された動物の剥製がある。グループワークや交流会、調査・研究活動のまとめ、分析、データ処理等に幅広く活用できる施設設備が充実している。（環境棟は、県内児童生徒の雨天時の学習の場の役割）

自然植物園：尾瀬を模した小湿地があり、尾瀬と同様の木道が敷設されている。

授業や自然環境調査、自然観察会等に活用されている。



自然環境棟



自然環境棟内の資料室



研究室

②自然環境科授業視察

・自然環境科について

環境科学コース：理科、数学、英語を中心に学習し、主に大学進学を目指す生徒のためのコース

自然環境コース：様々な教科の学習や体験学習を通して、実社会における課題に対応できる実践力身につけたい生徒のためのコース

- ・今回は自然環境科 2 年の環境測定を視察

事前のフィールドワークで得られたデータをもとに班ごと考察し、中央のミーティングルームで全体発表を行う。各自フィールドノートを活用しており、すべての生徒が大いに活用している様子が見られた。



自然環境科の授業風景

(2) 地域協働活動の視察

①学校活性化委員会

第 2 回専門委員会に参加。活動報告から始まり、利根沼田・片品尾瀬地域活性化プロジェクト（尾瀬高校を舞台とした小説・アニメ化プロジェクト）の進捗報告・相談、意見交換の流れで 18:00～19:50 までの熱い議論が交わされた。



学校活性化委員会の様子

②尾瀬ハートフルホーム・システム

尾瀬高校で教育を受けたい人で、自宅からの通学が困難（公共の交通機関利用で約 2 時間以上）な人に対するのホームステイ制度（下宿生活）。生活アドバイザー（生活指導員）等のサポートを受けて、30 名前後がこの制度を利用している。平成 8 年にスタートし、県から財政支援がある。（受け入れ先へ：1 人×1 月×3 万 5 千円、定員 40 人）

全国コミュニティー・スクール研究大会
地域とともにある学校づくり推進フォーラム 2023 南部町

渡具知 美和

令和 5 年 12 月 15 日、全国コミュニティー・スクール研究大会が鳥取県の南部町で行われた。会場となった米子コンベンションセンターには、全国から 1600 人（内オンライン 800 人）の来場者があり、学校の校長、教頭、教育委員会、地域の代表と役職のある方々が多くみられた。大会は午前と午後の部にわかれ事例発表とパネルディスカッションが行われた。



『地域における教育力の低下』や『学校を取りまく問題の複雑化・困難化』など学校や子どもたち、地域が抱える課題を学校だけに任せるのではなく、地域全体で解決を図る必要性がある。この課題を学校と地域が共有し、協働する仕組みにコミュニティー・スクールがあり、保護者や地域住民が当事者意識を持って参画することで、様々な取り組みが活性化する、と考えられている。

開催地の南部町教育委員会の事例発表では、コミュニティー・スクールの充実・発展のために「まち未来科」を創設し、平成 18 年からすべての学校を指定しスタートさせた。しかし校長の理解や協力が得られず、教職員に伝わらない・学校運営協議会との連携が図れないなどで取り組みは停滞し、平成 27 年に一度仕切り直し、3 年後の平成 30 年に本格実施とあった。一度スタートさせた取り組みを仕切り直す勇気や本格実施までに 12 年を要した南部町教育委員会の大人の本気をみせつけられた内容であった。

地域と学校をつなぐコーディネーターは重要な存在で岩美高校では、2 名が高校に常駐し総合的な探究や広報関係を担当し、教職員の働き方改革につながる仕組みにもつながっていた。

コミュニティー・スクールにおいて大切なこと

- ・大人が本気になること
- ・持続可能な取り組みを計画する
- ・学校と地域が目指すこども像を共有し取り組む
- ・学校・地域・保護者・生徒と合意形成をはかる→熟議を交わす
- ・結果を求め過ぎない
- ・地域の特色を活かし、その学校にできることをする

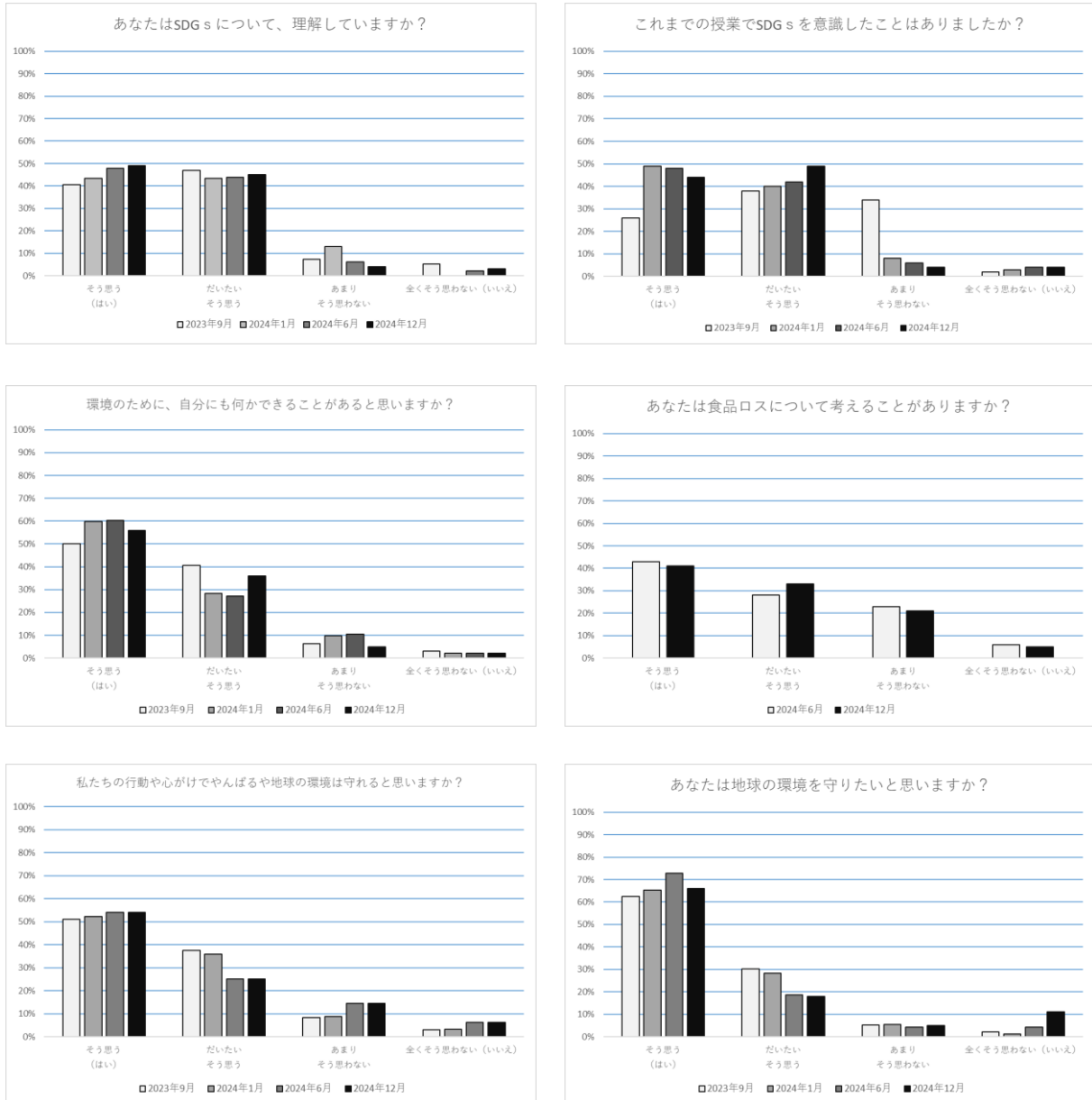
辺土名高校でもコミュニティー・スクールを実施するにあたり、子どもを取りまく大人なたちが本気になって、子どもたちの将来をともに考えよりよい未来につながる仕組みになってほしい。

Ⅷ 研究の結果と考察

1 アンケート結果

令和5年9月から令和6年12月までに生徒へ計4回、職員へ計3回のアンケートを実施し、学校全体での取り組みによって生徒と職員の環境教育及びSDGsに対する意識変容を検証した。

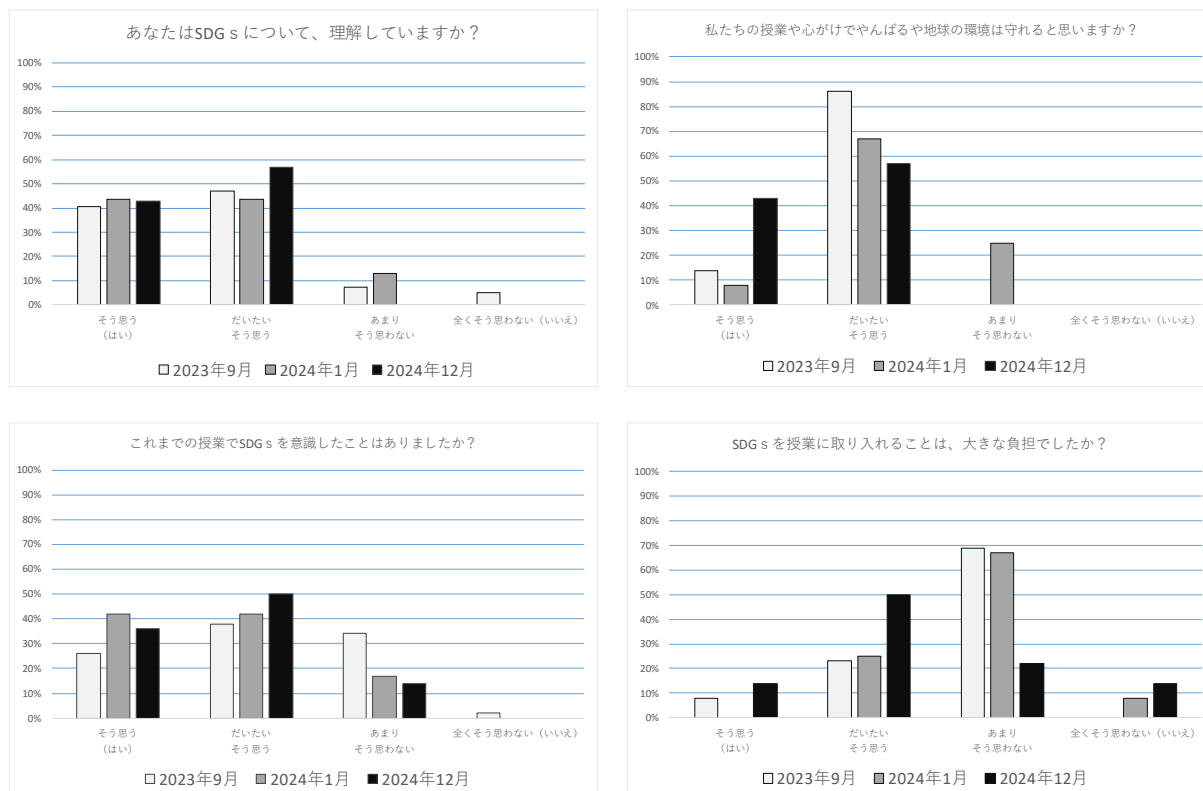
(1) 生徒へのアンケート結果



自由記述「やんばるや地球の環境を守るために、あなたにできることを書いてください。」

- ・ゴミの分別など些細なことを積み重ねる。
- ・ポイ捨てをしない。ごみを拾う。
- ・まずは、環境について知ることが環境保護の最低条件だと思います。
- ・みんなが正しい知識を持つ。
- ・食品ロスなどSDGsについて意識しながら生きる。
- ・いろんなボランティアなどの活動に参加して、課題を見つけることはもちろん、やんばるについて知り、発信していくことが何より大事だと思う。
- ・環境について高校の3年間で環境や環境を守る方法について学び、学んだことを利用して環境を守る仕事や環境を守るボランティアなどに参加する。また、日頃の生活でもSDGsを意識して生活する。
- ・SNSなどを通じて、やんばるの森の課題や現状を知ってもらう。
- ・ある一定の規定を儲け地球環境にプラスになるようにする。
- ・募金的な？

(2) 職員へのアンケート結果



2 考察

アンケート結果を令和5年9月～令和6年12月で比較すると「あなたはSDGsについて理解していますか」の項目で「そう思う」「だいたいそう思う」の合計が生徒では6ポイント増加し、職員においても12ポイントの増加が見られる。また、「これまでの授業でSDGsを意識したことはありましたか」の項目では、「そう思う」「だいたいそう思う」の合計が生徒では27ポイント、職員でも22ポイントの増加が見られる。このことから、これまで自然環境科に特化していた環境教育・SDGsを、普通科目や学校全体で意識した実践に引き上げることによって、全校生徒及び職員の環境教育やSDGsに対する意識を高めることができたと考える。一方で、職員に実施した「SDGsを授業に取り入れることは、大きな負担でしたか」の回答では「そう思う」「だいたいそう思う」の合計が33ポイント増加している。SDGsを取り入れた授業実践は生徒・職員双方の意識変容に良い効果をもたらしているが、教材研究や職員研修を行うことで負担感が増していることがわかる。学校教育において持続可能な社会の創り手の育成が求められる中で、SDGsを取り入れた実践はその実現に向けた役割を担っており、今後はすべての教科や活動において取り組んでいくことになる。今回の研究でSDGsを意識した授業実践の第一歩を踏み出したことで理解を深めることができたとともに、今後も各教科や学校全体でどのようにつながりを作っていくか研究を進めていく必要がある。

IX 成果と課題

1 成果

- (1) 普通科においても授業や特別活動、生徒会活動、学校行事等でSDGsを意識した取組や実践を行うことで、学校全体として環境教育及びSDGsに対する意識を高めることができた。

- (2) 自然環境科・サイエンス部の取り組みを共有する機会を設けることで、普通科の生徒へ環境やSDGsについて考えるきっかけ作りを行うことができた。
- (3) 全職員がSDGsを意識した授業実践への第一歩を踏み出し、SDGs及び環境教育への理解を深めることができた。
- (4) 校外のシンポジウムや学会、生き物博物館を活用した環境学習や各種イベントの参加によって、世代や地域の枠を超えた幅広い人たちに生き物を親しむ心や、やんばるの魅力、抱える課題を共有することができた。

2 課題

- (1) 学校全体として環境教育及びSDGsに対する意識を高めることができたものの、依然として自然環境科・サイエンス部独自の取り組みが多く、それ以外の生徒については十分ではない。授業や学校行事だけでなく、地域や企業と協力しながら普通科の生徒にも学ぶ機会を提供していきたい。
- (2) 外部との交流において大きな役割を持つ「生き物博物館」の運営に金銭的、人間的に大きな課題がある。持続可能な運営体制に向け、展示内容の改善と地域との協力体制を築いていく必要がある。
- (3) 世界自然遺産登録に伴い、地域内外を問わず様々な団体からサイエンス部へのイベント協力依頼がある。これまで以上にSDGs17「パートナーシップで目標を達成しよう」を実践していく必要がある。このような経験が本校生徒にフィードバックされることで、SDGs4「質の高い教育をみんなに」を達成することに繋がるが、全てのイベントに参加することは困難である。どのように優先順位を付け取捨選択をしていけばいいのか検討する必要がある。